

現代日本人における「道徳性」に関する 意識構造の心理学的解明の試論

—「道徳性尺度」作成のための予備的調査—

A Study on the Sense of Morality in Japan : A Preliminary Research.

阿 部 洋 子

要 旨

現在、発行されている小学校および中学校の「道徳」の教科書で扱われている道徳の内容を表わす下位項目と、かつて使われていた「修身」の教科書で扱われていた徳目に対して、現代日本人が、どのような意識を持っているかを検討するに先立ち、それら111項目が道徳性としての適切性・重要性をどの程度、有しているかを検討すると共に、死語となっていないかどうかの確認をすることにした。

調査1では、教職にあり、「道徳」について興味・関心の高い成人5人を対象に、道徳的に「良い」行為がどの程度、重要で、適切なものであるかを判定して貰うことにした。調査2では、「道徳」について特に興味・関心がある訳ではない青年女子39人を対象に、その言葉の意味が分かるかどうかを判定して貰うことにした。意味不明な言葉、イメージできない言葉について、意識構造の調査を実施することは無意味である故、先ずこの篩い分けをする必要があると考えたからである。

適切性および重要性の評価点についてのクロス表を作成したところ、適切性・重要性共に、上位1/3に入る項目、即ち道徳性を考えるに当たり、非常に適切であり、且つ重要だと判断された項目は27項目であった。思いやり、人間愛など抽象度の高い「愛」に関する項目、「平等」に関する項目が多く見られた。これに対して、下位1/3に入る項目、即ち道徳性を考えるに当たり、適切でなく、且つ重要でないと判断された項目は26項目であった。詳細を見ると長幼の序、恩、義理、恥を知るなど古めかしい響きのある項目、遵法の精神など「ルール」に関する項目、家族愛、きょうだい愛など具体性の高い「愛」が見られた。また従来、日本人の特徴として良しとされていた、真面目、謙遜なども低い評価がなされていることが分かった。調査2では、10名(25.64

%) 以上によって意味不明と選択された項目は、敬虔、長幼の序、遵法の精神、公德心などが選定され、「ルール」に関する言葉が死語になりつつあることが分かった。また重要性の評価点を用い、クラスター分析を実施したところ、「思いやり」が道徳性において重要な地位にあることが示唆された。しかし抽象度が高く、これを世代間伝達していくのは難しいように思われる。また従前の日本人の良さと言われていた行為は、強権によりやらされていたものと捉えられており、それ故、現代ではやらなくてもよいと判断され、評価が低くなったように思われる。また、それらの行為は青年たちにとって死語になりつつあることも認められた。

問 題

子どもに道徳性を身につけさせたい、また身につけることは重要なことだと思っている親も教師も多いはずである。しかしその思いとは裏腹に犯罪や、他人に迷惑をかける問題行動は減少していない。青少年の犯罪は増えているという指摘があるが、一方ではむしろ減少しているという指摘もある。では何故世間は驚かされるのだろうか。それは「まさか、あの子が」というごく普通の青少年が、容易く殺人、放火、強盗などをやってのけていることにあるのではないだろうか。

第二次世界大戦以前、また戦後間もない頃の犯罪は、貧しさ故にであったと言われていた。それ故、社会が豊かになり、罪を犯し易い環境を減少させるべく整備すれば、青少年を健全に育成することができるはずだと日本の社会全体が思っていたのではないだろうか。ところが経済的に豊かになった現在、犯罪の数は減少したかもしれないが、その一方でごく普通の青少年が行うものとなってしまった。ここで言う“ごく普通の”とは、“ある程度豊かな、中流階級の”とか“周囲から不良少年・不良少女とは見做されていない”などを意味する。だから世間は驚くのである。衣食住は満たされ、両親が健在であっても、また派手な服装、目立つ髪形をしていなくても、重大な罪を犯すケースが発生しているのである。

何故、このような事態が生じたのだろうか。学歴偏重社会、親子関係の希薄化、モラルの廃頽などいくつかの説明概念が提出されているが、決定的なものは示されていない。現代日本人において“道徳性の崩壊と維持”、“ルールの無視と遵守”などに関係する意識構造が、どのようになっているのかを心理学的に解明することが、青少年の問題行動や犯罪の原因を知る一助となるのではないかと考える。

かつて小泉八雲が日本人を「この国の民は、老若男女を問わず、職業の貴賤を問わず、一人一人が西洋の紳士淑女のようである」と評した。しかし、現代の日本人はどうであろうか。挨拶をしない、呼ばれても返事をしない、ありがとうという一言が言えないなど、若者の問題行動が批判されている。しかし問題は若者や子どもの側にあるのではなく、むしろ大人の側にあるのではないだろうか。

昔、炭鉱夫は坑道に入るとき、必ずカゴに入れたカナリヤを持って行ったと言う。それは、坑内に有毒ガスが発生したときに、最初に犠牲となるのが弱いカナリヤだからである。止まり木から落ちたカナリヤを見て、炭鉱夫たちは坑内から慌てて逃げ出すのであった。これは、社会が荒廃したときに、問題行動を起こすなどして、最初に犠牲になるのが児童・青年などの若者たちであることの例えとしてよく使われ。若者の道徳性に関する問題行動の背景にも、大人の問題行動があると言えるのではないだろうか。

ところで、道徳性とは何であろうか。大西（1991）によって、様々な定義づけが試みられているが、例えば、生まれながらに人間に備わっている「善を道（ふみおこな）う」、あるいは「善を道（ふみおこなおう）とする」心の状態だと定義される。しかしこのことは、子どもは放っておいても善を行い、悪を行わない生き物だということを述べているのではない。これは、多くの研究が、親・大人・社会が、子どもに対して与える、意図的・無意図的な善悪の判断、満足感、自責感の重要性を説いていることから明らかであろう。

そこで、道徳性に関する諸説を概観することにする。初めに、ピアジェ（Piaget, 1954）の認知の発達心理学である。ピアジェは、発達段階において、子どもは昼夜の交替など、物理的な事象から、自分の周りに規則性があることを知っていく。つまり自己中心性からの脱却である。次に親や大人を尊敬するが故に、彼らが示す規則を絶対視する時期がある。次に規則の中にはメンバーの合意があれば修正可能なものがあることに気づく。これが拘束性から共同性へ、他律から自律への目覚めの時期である。ここで重要なのは、大人がどのように拘束しないように対応しようとも、子どもたちは「大人を尊敬しており、それ故、何かを示してくれることを期待している」時期が存在しているということである。

次にバンデュラ（Bandura, 1979, 1986）の社会的認知理論的に言えば、子どもは大人などの年長者の道徳的行動を観察し、模倣（モデリング）することによって、新しい行動レパートリーと、自分の行動を調整する機能をも獲得するのである。しかしこの自己調整機能が獲得されても、常に道徳的な行動がなされる訳ではない。本来生ずべき「自己満足感」や「自責感」を持つといった自己反応が生じず、自己調整メカニズムが不活性化することがある。「自己満足感」とは「すべきこと」をした、あるいは「すべきでないこと」をしなかったときに生じる感情である。一方「自責感」は「すべきこと」をしなかった、あるいは「すべきでないこと」をしてしまったときに生じる感情である。

子どもを取り巻く、親・大人・集団が、「何もそこまでしなくても」と子どもに対してドンドン甘くしていくとする。あるいは社会全体が、決り事やルールを守ること、維持することに対して緩やかになるとする。そうすると子どもは道徳的行動をしても、しなくても、満足感も自責感も生ずる機会を失ってしまうことになる。そして次第に自己調整機能は不活性化することになってしまうのである。つまり、知識として「すべきこと」「すべきでないこと」を知っていても、

満足感や自責感を持つ機会が減少すると、道徳的行為が実際の行為として生起しなくなるのではないかという指摘である。そしてこのことは、道徳的行為を知識として注入することの限界と、道徳教育やプログラムが建前教育で終わってしまうという批判を裏付けてもいるように思われる。

小泉八雲が日本に帰化した当時、国民が受けていた教育レベルも、生活レベルも、相対的に現在より遥かに低かったはずである。それにも関わらず、紳士淑女と言わさしめたのは、家庭や地域に教育力があり、本音の教育を行うことができていたからではないだろうか。

最後にフロイト (Freud, S., 1970) の精神分析的立場から言えば、エディプス期 (5歳) を挟んだ3~6-7歳頃に、父親への同一視と、父親の取り入れの2つの心理的規制によって「超自我」が形成されることになる。新生児は、最初、無道徳状態にあるが、徐々に、両親や養育者から課せられた道徳的価値を、人格に組み込んでいくようになる。これは価値だけを吸収するのではなく、これらの価値に従った、あるいは従わなかったときに、自動的に自尊心や罪悪感などに関係する情動を経験することを意味している。こうして「超自我」は形成されるのである。

つまり「超自我」は「お前は父親のようであらねばならぬ」と要求することによって「すべきである」という肯定的機能を獲得し、これが「自我理想」を形成する。他方「お前は父親のようであることは許されない」という禁制を要求し、これが「良心」を形成する。「すべきであること」をすることによって、両親やその所属集団から承認を受けたり、善を行うことによって、自尊心を持つことになる。「すべきでないこと」をすることによって、懲罰が伴うという思い、罰せられるのではないかという思いを持ち、悪を行うことによって、罪悪感を持つのである。

これまで私は「罪悪感」に関する一連の調査研究を実施した (阿部: 1996, 1997, 2001)。ここでは、法的な罰則規定の有無に関わらず、具体的な反社会的行為 (例えば、いじめ、万引きなど) を取り上げ、①「悪さの程度」の問題、②ルールがあるのか、個人の自由に任せられる行為なのかという「領域判断」の問題、③その行為をすることが、どのような状況であれば許されるのかという「許容条件」の問題、などについて幾つかの知見を得た。例えば、「動物虐待」の方が「人間をいじめる」より、悪さの得点は高く、「動物虐待」の方が、状況が変化しても悪さの程度は高く、「人間をいじめる」方は、許容条件が付加されると、悪さの得点が低くなるなど、一般的に予想される結果と異なるものも得られた。

目的および方法

本研究では、これまで実施した道徳的に「悪い」行為ではなく、「良い」行為を取り上げることにした。まず、道徳的に「良い」行為をどのように選定するかに当たり、

1. 現在、発行されている文部科学省検定済みの「小学校・道徳」「中学校・道徳」の教科書で扱われている道徳の内容を表わす下位項目を検討する。
2. かつて使われていた「修身」の教科書で扱われていた「徳目」を検討する。

3. 心理検査として発売されている「道徳性検査」の下位項目を検討する。

4. 哲学・倫理学・教育学・文学作品などから道徳に関する事柄を抽出し、検討する。

などが考えられる。すべてを実施することが好ましいと考えられるが、取り敢えず現在、発行されている文部科学省検定済みの「小学校・道徳」「中学校・道徳」の教科書で扱われている下位項目と、かつて使われていた「修身」の教科書で扱われていた徳目に対して、現代日本人が、どのような意識を持っているかを検討するに先立ち、それらの項目が道徳性としての適切性・重要性をどの程度、有しているかを検討すると共に、死語となっていないかどうかの確認をすることにした。

(1) 調査対象者

調査は2段階で実施した。即ち、調査1では、「道徳」について興味・関心の高い成人を対象に、道徳的に「良い」行為がどの程度、重要で、適切なものであるかを判定して貰うことにした。調査2では、「道徳」について特に興味・関心がある訳ではない青年女子を対象に、その言葉の意味が分かるかどうかを判定して貰うことにした。一般成人に比して「道徳」に対する興味・関心が高いと考えられる者が、その内容を理解できる言葉でも、「道徳」に対する興味・関心がそれほど高くない者にとっては、それらは死語になってしまっている場合がある。意味不明な言葉、イメージできない言葉について、意識構造の調査を実施することは無意味である。それ故、先ずこの篩い分けをする必要があると考えた。調査1・2の調査対象者はそれぞれ次の通りである。

調査1：小学校教師（男性1名）、中学校教師（男性1名）、大学教師（女性2名）、塾教師（女性1名）の成人男女、計5人（年齢：平均=40.20歳、SD=7.88）。

調査2：埼玉県私立女子大生39人（年齢：平均=20.88歳、SD=1.33）。

(2) 調査用紙および調査期間

調査1：現在、発行されている文部科学省検定済みの「小学校・道徳」「中学校・道徳」の教科書（村井他，1991）で扱われている道徳の内容を表わす下位項目と、かつて使われていた「修身」の教科書（宮坂，2000）で扱われていた徳目から、合計111項目を抽出し、それらについて「適切性」と「重要性」の2側面から検討するために独自の調査用紙を作成した。適切性については「適切である」「わからない」「不適切である」の3件法による評定をして貰った。重要性については「非常に重要だ：10点」から「全く重要でない：0点」の範囲でマグニチュード測定法による評定をして貰った。なお回答するに当たり、辞書類を見ないで判断するよう求めた。また真摯な態度で、時間を十分かけて回答をする必要があるため、実施方法は留置法であり、2週間程度を目安に回答を終え、郵送にて返却するよう求めた。調査期間は、平成15年1月の約1ヶ月

間であり、回収率は100%であった。

調査2：調査1で用いた調査用紙の道徳性の下位項目111項目について、言葉の意味が不明なもの、あるいはイメージが全く湧かないものを抽出して貰った。なお回答するに当たり、辞書類を見ないで判断することは、調査1と同様である。実施方法は、留置法であり、1週間以内に調査者に直接、手渡しで返却するよう求めた。調査期間は、平成15年6月の約1ヶ月間であり、回収率は100%であった。

結果*

調査1

(1) 適切性・重要性の評価点の概観（表1）

適切性および重要性の評価点について、5人の平均値をそれぞれ求めた。その結果、適切性の平均値は2.55点（SD=.31）、上位1/3項目（37項目）の得点は2.75点、下位1/3（37項目）の得点は2.40点であった。重要性の平均点は6.74点（SD=1.53点）、上位1/3項目（37項目）の得点は7.25点、下位1/3（37項目）の得点は5.75点であった。

適切性および重要性についてのクロス表を作成したところ、適切性・重要性共に、上位1/3に入る道徳性の下位項目、即ち道徳性を考えるに当たり、非常に適切であり、且つ重要だと判断された項目は27項目であった。詳細を見ると、「思いやり」「人間愛」「人類愛」「親切」「友情」「寛容」「慈愛」「仁愛」「博愛」など「愛」に関する項目、「平等」「公正」「公平」など「平等」に関する項目が多く見られた。

これに対して、下位1/3に入る道徳性の下位項目、即ち道徳性を考えるに当たり、適切でなく、且つ重要でないと判断された項目は26項目であった。詳細を見ると「親孝行」「孝養」「長幼の序」など年齢差のある人間関係によって生じる項目、「謝恩」「恩」「義理」など、自分が受けた善意や援助によって、心に或る負担を生じさせる項目、「恥を知る」「不撓不屈」「節度」「至誠」「謙遜」「堪忍」「和合」など古めかしい響きのある項目が多く見られた。これらは必ずしも「修身」の教科書で扱われた徳目ではなく、現在の「道徳」の教科書でも扱われているものである。その他、「遵法の精神」「同情」「共同」「創意工夫」なども見られた。

更に適切性、重要性共に中程度に分類された項目を詳細に見ると、従来、日本人の特徴として語られることが多かった「勤勉」「努力」「忍耐」「社会連帯の精神」「向上心」「集団生活の向上」「正直」などが見られた。

また重要性は中程度であるが、適切性が低程度に分類された項目を詳細に見ると、「自由」「合

* 結果の処理は『エクセル統計2002』（社会情報サービス）、『エクセル統計・多変量解析 Ver. 5.0』（エスミ）の統計ソフトを用いて行った。

表1. 道徳性の内容を表す項目の評定結果 (111項目) (項目の後ろにある () 内の数字は調査2における意味不明と回答された度数を示す)

	重要性の程度		
	(低) 5.75点以下 32項目	(中) 7.25点未満 ~ 5.76点以上 42項目	(高) 7.25点以上 37項目
(高) 2.75点以上 33項目	沈着冷静(2) 慈善(7) <u>2項目</u>	礼・礼儀 規則正しい生活 物の活用(3) 郷土愛(2) 節約 信義(8) <u>6項目</u>	思いやり 生命尊重 感謝 平等 人権 人間愛 思慮深さ(3) 公正(1) 人類愛(1) 責任感 社会への奉仕(1) 良心 健全な異性観(4) 個性の伸長(3) 親切 友情 寛容(5) 公德心(4) 公平 自律(1) <u>27項目</u>
(中) 2.75点未満 2.5点 31項目	寛大 勉強 秩序尊重(2) 金銭活用(1) <u>4項目</u>	信頼 家族愛 きょうだい愛 生き物を憐れむ(1) 勤勉 努力 信念 国民の義務 忍耐 国際親善 廉潔(3) ルール尊重 社会連帯の精神(1) 儉約(4) 真理愛(8) 時を重んじる(4) 規律尊重 向上心 強い意志 集団生活の向上 <u>22項目</u>	他人の名誉を重んずる(1) 国際理解 誠実 謙虚 克己(28) <u>5項目</u>
(低) 2.4点以下 45項目	恥を知る(1) 親孝行 遵法の精神(4) 謝恩 不撓不屈(3) 同情 共同 立志(2) 節度(4) 長幼の序(2)	恩 動物愛護 植物愛護 至誠(2) 愛校心(5) 目信 謙遜(4) 和合(6) 堪忍(7) 分を知る(1) 衛生 創意工夫(1) 孝養 先祖を敬う(2) 明朗(4) 義理(1) <u>26項目</u>	自然への畏敬(4) 自然への愛 生きる喜び 度量(2) 公益(5) <u>5項目</u>

適切性の程度

理性」「愛国心」「敬虔」などの他、「真面目」「勤労」「希望」「理想の実現」などが見られた。

(2) 重要性の評価点のクラスター分析

上述した(1)のクロス表(表1)で、適切性・重要性の評価点が共に、上位1/3に入った道徳性の27項目と、下位1/3に入った26項目、中程度1/3に入った22項目について、重要性の評価点を用いて、それぞれクラスター分析を実施した。

その結果、上位27項目は5つのクラスター(図1-1、表2-1)に分類された。各クラスターは、第1クラスターには「慈愛」「人類愛」他、第2クラスターには「思いやり」他、第3クラスターには「公德心」他、第4クラスターには「我慢」他、第5クラスターには「寛容」他が入った。

図1-1 クラスター分析(適切性・重要性の評価点上位の項目)

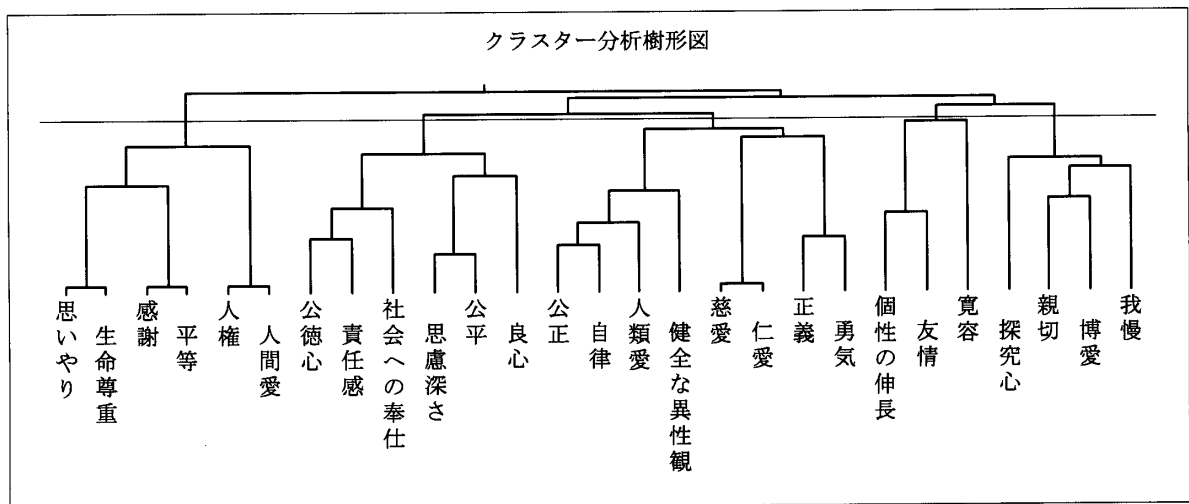


表2-1 クラスター別項目名(適切性・重要性の評価点上位の項目)

クラスターNo.	<1>	<2>	<3>	<4>	<5>	除外	合計
比率(%)	29.63	22.22	22.22	14.81	11.11	0	100.00
項目名	公正 人類愛 自律 健全な異性観 慈愛 仁愛 正義 勇気	思いやり 生命尊重 感謝 平等 人権 人間愛	公德心 思慮深さ 責任感 公平 社会への奉仕 良心	探究心 親切 我慢 博愛	個性の伸長 友情 寛容		

下位26項目は4つのクラスター（図1-2、表2-2）に分類された。各クラスターは、第1クラスターには「恩」「孝養」他、第2クラスターには「遵法の精神」「恥を知る」他、第3クラスターには「共同」他、第4クラスターには「同情」他が入った。

図1-2 クラスター分析（適切性・重要性の評価点下位の項目）

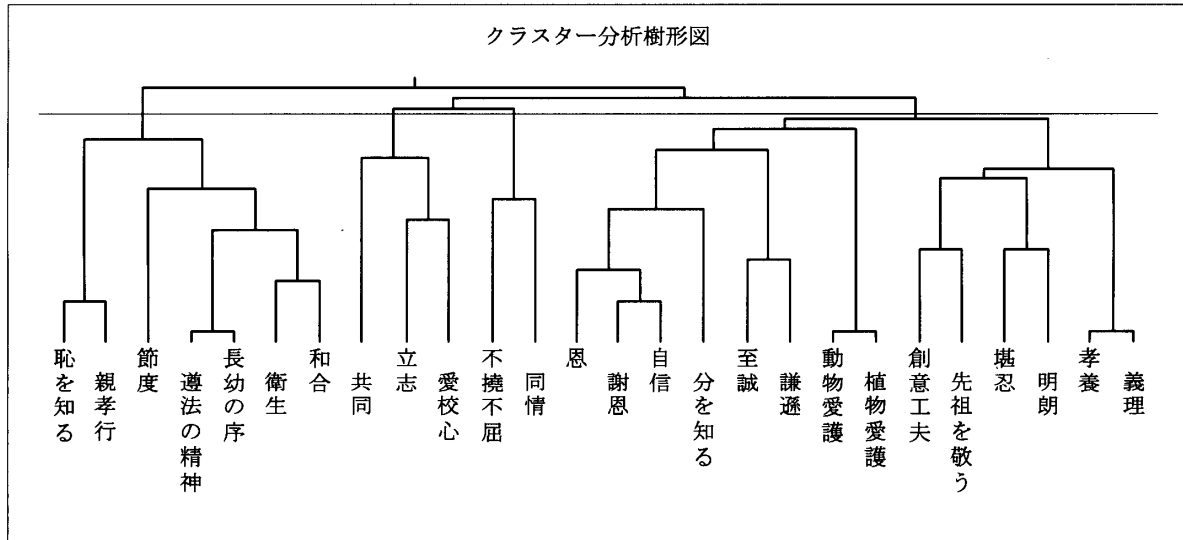


表2-2 クラスター別項目名（適切性・重要性の評価点下位の項目）

クラスターNo.	<1>	<2>	<3>	<4>	除外	合計
比率(%)	53.85	26.92	11.54	7.69	0	100.00
項目名	恩 動物愛護 植物愛護 謝恩 至誠 自信 分を知る 謙遜 創意工夫 堪忍 孝養 義理 先祖を敬う 明朗	恥を知る 親孝行 節度 遵法の精神 長幼の序 衛生 和合	共同 立志 愛校心	不撓不屈 同情		

中程度22項目は5つのクラスター（図1-3、表2-3）に分類された。各クラスターは、第1クラスターには「信頼」「家族愛」他、第2クラスターには「国際親善」他、第3クラスターには「正直」他、第4クラスターには「集団生活」他、第5クラスターには「儉約」他が入った。

図1-3 クラスター分析（適切性・重要性の評価点中程度の項目）

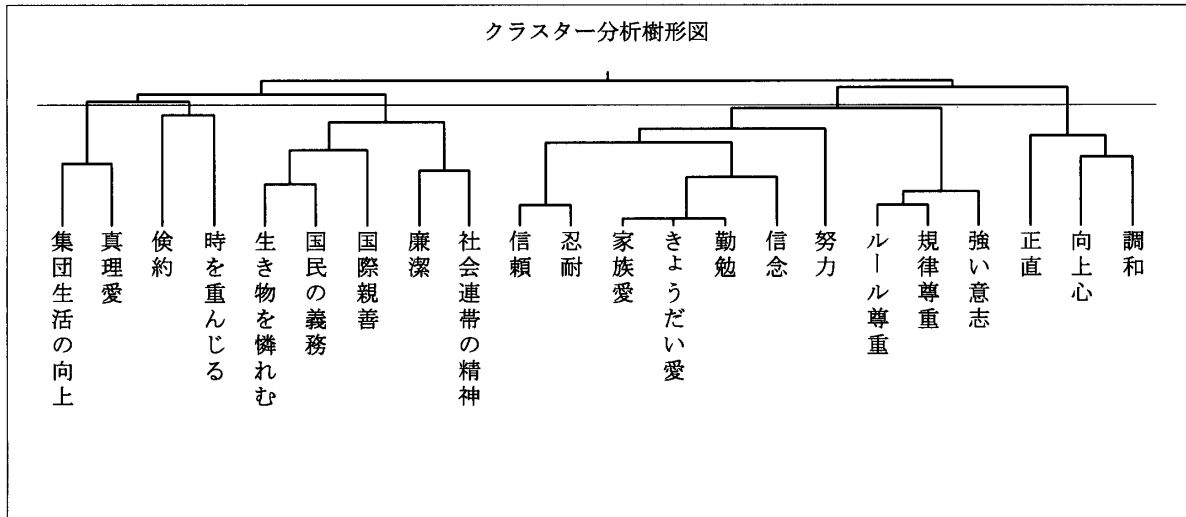


表2-3 クラスター別項目名（適切性・重要性の評価点中程度の項目）

クラスターNo.	<1>	<2>	<3>	<4>	<5>	除外	合計
比率(%)	45.45	22.73	13.64	9.09	9.09	0	100.00
項目名	信頼 家族愛 さようだい愛 勤勉 努力 信念 忍耐 ルール尊重 規律尊重 強い意志	生き物を憐れむ 国民の義務 国際親善 廉潔 社会連帯の精神	正直 向上心 調和	集団生活の向上 真理愛	儉約 時を重んじる		

調査 2

調査 1 で使用した道徳性に関する下位項目について、20歳代の青年たちによって、言葉の意味が理解できない、あるいはイメージが湧かないと判断された項目を整理した。その結果、調査対象者39名中、意味不明の言葉は1つもないと回答したのは2名であり、37名は2～26項目の範囲で意味不明の言葉があると回答した。

調査対象者の1/4である10名（25.64%）以上によって意味不明と選択された項目は、「敬虔」（32名：82.05%）、「不撓不屈」「廉潔」（31名：79.49%）、「長幼の序」（29名：74.36%）、「孝養」（69.23%）、「克己」（26名：66.67%）、「至誠」（23名：58.97%）、「遵法の精神」「公德心」（14名：35.90%）、「立志」「仁愛」「度量」（12名：30.77%）、「分を知る」（11名：28.21%）の13項目であった。

これら13項目を調査 1 で実施した教職にある5人によって、適切性と重要性を判断して貰ったクロス表（表 1）に当てはめて検討した。その結果、適切性・重要性が共に低いと判断された項目が7項目と最も多かった。詳細を見ると「不撓不屈」「長幼の序」「孝養」「至誠」「遵法の精神」「立志」「分を知る」が意味不明だと判断された。

適切性・重要性共に高いと判断された項目の中では「公德心」「仁愛」が意味不明だと判断された。

その他、適切性・重要性共に中程度であった項目の中では「廉潔」、適切性が低程度、重要性が中程度であった項目の中では「敬虔」、適切性が低程度、重要性が高程度であった項目の中では「度量」、適切性が中程度、重要性が高程度であった項目の中では「克己」がそれぞれ意味不明だと判断された。

考察および結論

調査 1

(1) 適切性・重要性の評価点の概観

①愛について：「愛」に関する項目について詳細に見ると、「愛」を具体的な形で実現する「家族愛」「きょうだい愛」「生き物を憐れむ」は、適切性、重要性共に中程度に分類され、「動物愛護」「植物愛護」「愛校心」は、適切性、重要性共に低いと判断され、「郷土愛」は適切性が高く、重要性が中程度に分類され、「愛国心」は適切性が低く、重要性が中程度に分類された。これに対して、適切性、重要性が共に高いと判断された「愛」は「思いやり」「仁愛」などいずれも抽象度の高いものであった。

これらのことから、教職にあり、道徳に対して興味・関心の高い対象者にとっては、具体性の高い「愛」より、抽象度の高い「愛」の方を道徳性として教育していくことが適切であり、重要だと考える傾向にあると推測される。これは戦後の道徳教育が、「思いやり」「人間愛」など抽象

度の高い概念を教育目標として上げ、その下でどのような例話を使用するかを、教師個人や学校単位に一任するという方法を採用した影響が出ているのかもしれない。しかし、家族やきょうだいに対する愛、動植物を愛護する、自分の通う学校を大切に思うなど身近な事柄を通さずして、一体どのようにして、抽象度の高い「愛」という概念を教え、身に付けさせていくことができるというのであろうか。

②ルールについて：「ルール」に関する項目について詳細に見ると、「公德心」は適切性、重要性共に高いと判断されたが、それ以外の項目、例えば「ルール尊重」「規律尊重」は、適切性、重要性共に中程度、「遵法」は適切性、重要性共に低いと判断、「秩序尊重」は適切性が中程度、重要性が低いと判断され、「規則正しい生活」は適切性が高く、重要性が中程度に分類された。

これらのことは何を意味するのであろうか。教職にあり、道徳に対して興味・関心の高い対象者にあっては、あるいはそうした対象者であってさえも、「ルール」については道徳で扱われるものではなく、法律によって扱われるものだと考えているということを示しているのであろうか。しかし社会的慣習の多くは法律によって規定されている訳ではない。そうした「ルール」は、一体どこで、誰から伝達されていくことになるのだろうか。「ルール」を道徳性の問題として扱うことの適切性、重要性の程度が低下傾向にあることは、現実の社会では既に蔓延しているのかもしれない。現代日本において、ごく普通の少年たちが容易く罪を犯すという現状や秩序の欠如した状況は、「ルール」を道徳性の問題として扱う必要はないという意識構造によって説明することができるという結果を得たと言えるのかもしれない。

③平等について：「平等」「公正」「公平」など平等に関係すると思われる項目は、適切性、重要性共に高いと判断され、「親孝行」「長幼の序」「分を知る」「孝養」など年齢差のある人間関係によって生じる項目、「謝恩」「恩」「義理」など自分が受けた善意や援助によって心に或る負担を生じさせる項目は、適切性、重要性共に低いと判断された。これは人権が平等に尊重されるべきものだという考え方を遥かに超越した、人間を横一列に並べるといふ、区別を無視した、あるいは各自の特性を無視した、「無差別」の考え方に繋がるものであろう。授業と休み時間の「けじめ」をつけることができなくなった子どもたちによる学級崩壊の現状のある部分は、「ルール無視」だけでなく、この区別をつけることができない意識構造によって説明可能であるのかもしれない。

④従来の日本人の特徴とされていた項目について：従来、日本人の特徴として指摘されていた「勤勉」「努力」「社会連帯の精神」などは適切性、重要性共に中程度のセルの中に多く見られた。また「真面目」「勤労」「希望」「理想の実現」など、高度経済成長を実現させたと考えられる様々な行為は適切性が低く、重要性が中程度のセルの中に多く見られた。更に戦後、否定的に捉えられるようになった「恥を知る」「謙遜」「和合」などは適切性、重要性共に低いと判断された

セルの中に多く見られた。これらは一体何を意味するのであろうか。穿った見方であるかもしれないが、従前、日本人の特徴として善しとされていた様々な事柄が、道徳性を考えるに当たり適正性・重要性共に低いもの、価値のないものとして判断される方向に向かっているのではないかという危惧を持つ。高度経済成長を実現させるために理想を持って、真面目に働いたこと自体が問題ではない。それによって得た豊かさを生かしきれなかったところに問題があるはずだが、この結果は真面目さや希望をもって、理想を実現させることを否定的に捉えることになってしまったのかもしれない。日本人が日本人としての自信が持てないことの影響因として、こうした従前の日本人のあり方をマイナスの方向へと引き下げ、アイデンティティを揺がすような力が働いているのではないかと思われる。但し、この結果は、調査対象者の属性に大きく影響されているものであるかもしれない。道徳性に興味・関心のない集団に調査を実施すれば、従前の日本人の特徴を低く価値づけるかどうかは不明である。今後の検討課題として、是非、広い範囲で調査を実施したいと考える。

(2) 重要性の評価点のクラスター分析結果

適切性・重要性の高い項目

①「思いやり」「良心」について：思いやりのある子どもに育てようとか、思いやりのある人が好きですなど、現代の日本では、この「思いやり」という言葉がキーワードになっているのではないだろうか。どの下位項目と関係性が強いのかを検討してみたところ、それは「人間愛」「生命尊重」「人権」「平等」などであった。「親切」は第4クラスター、「友情」は第5クラスターで、独立した構造を形成している。「友情」には「寛容」さが大切で、それは「個性の伸長」に有効に働くと考えられているようである。「親切」は「博愛」の精神と関係するだけでなく、「探求心」がそうであるように「我慢」が必要だと考えられているようである。このように「思いやり」という言葉は、「親切」や「友情」とは独立した「人間愛」という抽象度の高いレベルで捉えられているようである。

その一方で、「良心」は第3クラスターに分類されており、これは「公德心」「社会への奉仕」と関係性が強く、内面的あるいは至上なるものというより、むしろ社会慣習的、社会関係性のレベルのものとして捉えられているように思われる。現代の日本人においては「良心」という言葉より、「思いやり」という言葉の方がより至高性が強く、道徳性を語る上で重要な概念になりつつあることを示唆しているように思われる。

適切性・重要性の低い項目

②タテの人間関係について：「和合」「恥を知る」は、「遵法の精神」と共に第2クラスターに分類されたが、これは法律あるいは国家権力など、強権が外在することで維持されるものだと捉えていることを示唆しているのではないだろうか。また「孝養」「先祖を敬う」は第1クラスターに分類されたが、これは親子関係などタテの家族関係は「義理」や「恩」に縛られた関係で、

それを果たすためには耐え忍ぶことと、謙ること（「堪忍」「謙遜」）などが必要だと考えているということかもしれない。また「愛校心」は第3クラスターに分類された。これは「立志」「共同」と関係性が強いと捉えられており、学校というものが、立身出世するための場であると同時に、「共同」というものについてを学ぶ場という二面性を有していることを示唆しているように思われる。

適切性・重要性の中程度の項目

③家族愛について：「家族愛」「きょうだい愛」は第1クラスターに分類された。これらを形成し、維持するためには「信頼」「忍耐」が必要だということを示唆しているのかもしれない。また第1クラスターには「ルール尊重」「規律尊重」が分類された。これらの維持には「強い意志」が必要だということを示唆しているように思われる。即ち、家族の中にあっても、その関係性を円滑に運営するためには、何らかのルールの存在が必要だということを示唆しているのかもしれない。

④国際親善について：「国際親善」「社会連帯の精神」などは第2クラスターに分類された。これらは「国民の義務」と関係性が強いとされている。これは国際協力・国際交流などのやり方が、日本人は下手だという反省に依拠するのかもしれない。「国民の義務」としてやれば、必ずやれるはずだということなのだろうか。また国内においては、私主義に走り、連帯意識が希薄になったと考え、これを強化しなければならないという思いから、「社会連帯の精神」が「国民の義務」と関連づけられたのかもしれない。

以上、クラスター分析を実施し、検討を加えたが、この結果が、調査対象者の属性に大きく影響されているものであることは否めない。今後、調査対象者の人数だけでなく、職業、居住地などを考慮し、年齢層を拡大していく必要があるだろう。しかし、「思いやり」が道徳性において非常に重要な地位にあることが見えてきたものの、「思いやり」というものは抽象的でその内容を伝達することは困難そうである。また、従前の日本人の特徴とされていた項目は、強権によってやらされていたことであり、我慢してやっていたことなので、現代ではやる必要はないと判断され、評価が低くなったのではないかということが見えてきたように思われる。

調査2

①死語になりつつある道徳の内容を表わす言葉の特徴

取り立てて道徳性に興味・関心がある訳ではない女子青年を対象に、調査1で使用した、道徳の下位項目111項目について、その言葉の意味が不明であったり、イメージが湧かないものを抽出して貰った。その結果の中から調査対象者の1/4である10名（25.64%）以上の者が意味不明と選択したものの13項目について検討を加えると、「不撓不屈」「廉潔」など、日常的に見聞きする機

会が少なくなった言葉であると言えよう。しかし言葉は精神活動を反映していることを考えると、道徳に関する言葉の多くが死語になるということは、そうした精神性が減少しつつあることを意味しているとも考えられる。したがって死語の増加を、近年の若者のボキャブラリが貧しくなったと嘆くに留めるべきではなかろう。

因みに111項目中、1回以上、意味不明と選択された言葉の総数は54項目であり、約半数であった。39名全員によって意味が分かると判断された項目は、例えば「思いやり」「感謝」「平等」「人権」「自由」「誠実」「正直」「国際理解」などであり、日常的に使用されている道徳に関する言葉がこれらであることが推測される。

また、「長幼の序」「孝養」など年齢差のある人間関係、親子関係などを大切にす道徳性の項目が死語になりつつあるということは、自分たち以前の世代との関係が希薄になっているということではないだろうか。これは物心両面で、伝統を継承することが困難になることを示唆しているように思われる。

②「公德心」という言葉が死語になりつつある意味

ところで調査1で適切性・重要性共に高程度に分類された「ルール」に関する項目は「公德心」だけであった。それ以外の項目は適切性・重要性がそれほど高い評価が得られなかった。その意味で「公德心」は「ルール」を維持するための最後の砦と言える項目である。ところが、青年からは意味不明の言葉として14名(35.90%)から選択されてしまっており、死語になりつつある言葉だと言えよう。これは大人社会から公德心が消えつつあることを青年たちが敏感に感じていることによるのかもしれない。

また調査1で適切性・重要性共に低いと判断された26項目中、約2/3に当たる17項目が1名以上によって意味不明だと判断されている。この結果は、他のセルでは見られない特徴である。これも大人社会で価値が下がった項目、消えつつある行為であるが故に、青年にとっては意味不明、イメージが湧かない事柄になってしまったということを示唆しているのかもしれない。今後、青年を調査対象とするだけでなく、成人も調査対象として、道徳性に関する項目の中から、死語になりつつある言葉を確認しておく必要があると思われる。

参考文献

- 阿部洋子 1996 道徳性尺度作成の試み——予備的研究 日本女子大学 紀要 人間社会学部 6, 161-177
- 阿部洋子 1997 道徳性尺度作成の試み——予備的研究(2) 日本女子大学 紀要 人間社会学部 7, 101-123
- 阿部洋子 2001 現代日本の成人女子における罪悪感に関する意識構造 日本女子大学 紀要 人間社会学部 11, 101-137
- バンデュラ, A. 原野広太郎(監訳) 1979 社会学習理論: 人間理解と教育の基礎 金子書房
(Bandura, A. 1977 Social learning theory. Englewood Cliffs, N. J. : Prentice-Hall.)

- Bandura, A. 1986 Social foundation of thought and action : A social cognitive theory. Englewood Cliffs, N. J. : Prentice-Hall.
- フロイト. S. 井村恒郎・小此木啓吾他（訳）1970「自我論・不安本能論」フロイト著作集第六巻 人文書院
- 宮坂宥洪（監修・解題）2000「修身」全資料集成 四季社
- 村井実・尾田幸雄・西村文雄（監修）1991 最新・わたしたちの道1～6 教育出版
- 村井実・尾田幸雄（監修）1991 最新中学・私たちの道1～3 教育出版
- 大西文行 1991 道徳性発達理論 大西文行（責任編集）新・児童心理学講座第9巻「道徳性と規範意識の発達」金子書房 pp.1-49.
- ピアジェ. J. 大伴茂（訳）1954「児童道徳判断の発達」臨床児童心理学Ⅲ 同文書院（Piaget, J. 1930 Le jugement moral chez l'enfant.）